

## [優秀賞]・[経済同友会賞]

Never give up on a dream !  
決して夢をあきらめないで！



岐阜県立大垣桜高等学校 福祉科3年 新川 菜奈

私には3歳上の姉がいました。昨年、20歳で新しい世界へ旅立った姉は重度の心身障害があり、誰かの手を借りないと生活することができませんでした。言葉が話すことはできないけれど、目や表情で気持ちやいろんなことを伝えてくれました。我が家では、人を支援することについて家族で話す機会が多くあり、私は福祉に興味を湧き、大垣桜高校の福祉科に入学しました。段ボール箱一杯の分厚い教科書を母や姉と一緒に見て、やる気でいっぱいになったことを覚えています。

大垣桜高校の福祉科で私が頑張ったことは3つあります。1つ目は、福祉の専門的な知識を身に付けたことです。人体の部位や筋肉や骨の名称などを細かく覚えたり、社会福祉に関する法律やその内容などを理解したりしました。入学当初は、難しく、投げ出したくなる時もありましたが、姉の傍らで勉強をしていると、不思議と前向きになり、福祉に関する専門用語などを一生懸命覚えることができました。勉強する私を見る姉の表情が、「頑張って。頑張って」と応援してくれているようだったからです。それらの知識は、介護福祉士になるためだけでなく、なってからも医師や看護師など多くの医療関係職と連携するために、必要な知識となります。実習に行くたびに、覚えた知識が利用者の方を支える全てのことにつながっていることを実感しました。

2つ目は、安全で適切な介護技術を身に付けることです。最初の頃は、先生方の模範を見て実践

するという学習の繰り返しでした。頭では理解したつもりでも、実際に自分が取り組んでみるとなかなか上手くいきません。友だち同士で利用者役と介護者役を交代しながら、練習を重ねましたが、いざ実習先で、利用者の方を目の前にすると、思うようにできず、自分を情けなく思うことも多々ありました。介助どころか話をするともままならず、どうしたらよいのか呆然とすることもありました。そんな時、職員の方が「Aさんの興味があることは歌ですよ。Aさんが若い頃に流行した歌を調べてみては？」と、助言をくださいました。早速、昭和の歌謡曲や昔の遊びなどを家族に聞いたり、調べたりしました。その内容を次の日、Aさんに話してみると、好きな曲名や歌手を教えてください、会話も弾みました。この経験から、福祉の仕事は、心から相手を理解することが大切だと実感しました。私たちは介護実習を高齢者福祉施設や障害者福祉施設などで、3年間にわたり、合計58日間行います。実習を通して、各施設の利用者の方の身体状態や生活形態の特徴を知り、利用者の方と深く関わることができたと思います。特に、私の印象に残ったのは高齢者福祉施設での実習です。1人の利用者の方を支援するための個別援助計画の立案の学習をしました。計画を立てるには、利用者の方のことを詳しく調べる必要があります。介護援助計画は、その人がその人らしく、その人が望む生活を支援するための大切な計画です。私が担当した利用者の方の情報収集は、

簡単なことではありませんでした。一方的な質問では、その人の本音を聞くことができません。傾聴だけでは自分の必要とする情報は入ってきません。疑問に思っていることを職員の方に質問したり、実習の帰りに学校に寄って先生に相談したりして、対策を考えました。そして、その人の健康状態や生活のペースに合わせてコミュニケーションを図ることを実践してみました。利用者の方が折り紙や塗り絵をしているときは一緒に作業をしながら、私自身も心を開いて話し、知りたいと思っていることを聞くと、スムーズに情報を収集することができました。利用者の方との距離も縮まったと感じることができたのです。このような利用者の方との信頼関係や絆が自分の自信となりました。最近では、あせらず落ち着いて介助をすることができ、利用者の方の要望や状況に合わせて対応するという応用力が付いてきたと実感しています。

3つ目は、自らコミュニケーション能力を高めようと努力したことです。例えば、姉が通っていた施設や地域の施設でボランティアを行ったり、実習でお世話になった施設の夏祭りに参加したりと積極的に活動に取り組みました。利用者の方との関わり方は、各施設の特徴があり、私のコミュニケーション能力の幅を広げることができました。特に、言葉で伝えることができない利用者の方に対し、「今、何がしたいのか、何を伝えたいのか」を読み取る洞察力や、表情や体の動きなど細かい部分を見て理解する観察力も養うことができました。さらに、利用者の方の自立支援をサポートするための具体的な介助方法を考え、実践することができるようになってきました。このような力が付いたのも、自分の夢に向かって努力できる専門高校で学ぶことができたからこそだと改めて思います。協力してくれる家族や先生方や仲間、そして利用者の方や施設の職員の方々、全ての人々に感謝の気持ちを持てるようになりました。

一方、福祉の学習を積み重ねるうちに、日本の

福祉の未来についても自分なりに考えるようになりました。日本では、定年を迎えた約800万人の団塊の世代が日常生活に手助けを必要とするようになるのは遠いことではありません。介護福祉士や看護師の数は大幅に不足しており、外国人の受け入れも始まっています。しかし、外国人が、日本語や日本文化を学べる仕組みが整っていない現在の体制では、外国人も施設も、そして何より利用者の方も大きな負担を抱える状況が生じるのではないのでしょうか。介護には、言葉を理解するだけでなく、言葉の裏にある意味をくみ取る力がが必要です。日本の伝統文化を大切にしたい細やかな配慮が行き届く介護を行うためには、私たち高校生がもっと介護福祉士や看護師などの医療の現場で働くことを目指す必要があるのではないのでしょうか。私たちがやりがいを持って学ぶ姿を発信し、価値のある仕事だと認める人が増えてくれると良いと思います。

大垣桜高校福祉科での経験は私の宝物であり、何事に対しても前向きで最後までやり遂げられる自分に成長できたと思います。家族は、私の笑顔で接するところや一生懸命に利用者の方に寄り添う姿に好感が持てると言ってくれました。照れくさいけれど、とても嬉しく、今の学びを活かしていることが誇らしく思えました。私は将来、理学療法士になりたいという夢を持つことができました。理学療法士は、基本的な運動能力や社会で適応する能力を維持・改善することで、その人らしい生活の獲得を支える専門職です。人は何歳になっても、身体が思うように動かなくなっても、姉のように生まれつきの障害があったとしても、自分らしい生活の実現を望んでいます。私は、その人が望む生活に近づけられるように、最大限のサポートをしていきたいと強く思います。大垣桜高校福祉科で身に付けた力や心を生かし、誰かの役に立つように頑張りたいです。姉からの応援も聞こえてくるようです。Never give up on a dream！ 決して夢をあきらめないで！